

学生たちと国際協力 途上国へ教育支援を

アジア料理店

Papateo のオーナーシェフ

小坂 ^{のりこ} 伯子さん

(玉縄台在住)

エネルギーでパワー溢れる行動派。面倒見の良い人柄に、学生たちの信望が集まる。明治学院大学の学生を中心に、海外支援活動をする同好組織「junko association」で17年余り、学生たちの良き相談相手、パートナー役を任じてきた。

21年前、明治学院大の現役で勉強のかたわらベトナム、ミャンマーへの教育支援を続け、20歳の若さで亡くなった高橋淳子さんの志を継いだのがこの junko association。貧弱な教育環境にあるアジアの国々の子供たちに、教育の機会を届けようと言うのが活動の主眼だった。



小坂さんも同じ明治学院大の出身。見えぬ糸でつながっていたのかもしれないが、活動にかかわるきっかけは17年前、鎌倉・小町に小坂さんが出店したアジア料理店「Papateo」に来店したお客さんとの縁による。「子育て、親の介護それだけでは人生むなしいですよ。一個人として何か社会に役立つことができなにか」。自分なりに考えていた時期でもあった。

ある日、お店を訪れたお客さんから、ベトナムのダナンに日本の学生たちのボランティアにより創設された「junko スクール」が存在すること、しかもその学生は明治学院大の学生たち。「よくぞ後輩学生がここまでのことを…」。
我が身を振り替えるきっかけを与えてくれたことになった。

アジア地域には小坂さんも縁が深い。大手メーカーの海外部門に在籍したご



主人は海外生活が長く、子供の教育を考えると転勤の度に同行することは不可能だったが、ジャカルタや近隣のアジア地域では家族一緒の生活を送った。

日本人社会よりも、現地の人たちに溶け込み、ともに生活する機会を多くすることを心がけた。折角の海

外生活、少しでも多く現地のありのままを知りたかったし、その分人々の生活や教育環境を深く見聞きすることが出来た。

子供たちに教育機会を

現地では、貧しいがゆえに教育もままならず、雑巾の絞り方や水道の蛇口の使い方すらわからないままメイドの仕事に就く若者が数多い。貧弱な教育ゆえの惨めさを目の当たりにしてきた。「大変なカルチャーショックでした。特にイスラム圏のインドネシアでは自分も貧しいのに、さらに貧しい人に1合のお米を分ける。引きくらべて日本に生まれ、義務教育が受けられる自分たちの幸せとのギャップ」。貧しさと幸せの大きな落差に、強い衝撃を受けた。

はからずも、アジア地域で体験し、見聞きした時の思いが、Junko associationの目的と重なったことになる。

ベトナム、ミャンマー両国が活動の中心になるが、現地では 100 万円あれば教育のための施設はある程度整う。Junko のメンバーが手弁当で現地の産品を買い付け、それを日本で販売し、利益はすべて現地の教育支援にむける。買い付けた商品はいくつかのお店で販売もするが、Papateo の場所を無償で提供し、今でこそ学生たちが適正な価格を設定するが、かつては小坂さんがもっぱら値付けをしていた。

学生たちも小坂さんのもとで、仕入れと販売の極意を学び、様々なイベントを企画したりしては商品をさばく。副次的効果もあって、junko のメンバーの

就活に、迎える企業側の評価はすこぶる高い。

ベトナム中部のダナンにある「junko スクール」*は、この基金によって完成した最初の学校。すでに数多くの卒業生を世に送り出し、また、明治学院大学が卒業生を研修に招いたりするまでに、交流は深まっている。



(*ミャンマーには建設資金の一部を出資した NO.1 Basic Education Highschool がある)

留学生の安らぎの場にも

こうした活動のつながりもあって、平成 23 年にはヤンゴン大学から研修生が国費で日本の国立大学に留学するなど、交流の輪はさらに広がりを見せる。ベトナムやミャンマーから日本に留学する彼らは、漢字やカタカナの読み書きなどを習得し、日本との懸け橋そして自国の発展へと目を輝かす。

「休日にもかかわらずみんな一所懸命勉強です。時にはお店に呼んで料理を食べてもらいます。和んだ彼らの表情をみると、こちらも元気をもらえます」。

年末の餅つきに呼んだ際には、別れ際「よいお年をお迎えください、と言うんですね。日本の子供でも言えないようなことを。どこで学んだの。思わず聞き返すほどでした」。

小坂さんの活動は、アジア料理を提供する Papateo がベースにあるが、junko の学生たちと共に、恵まれないアジアの国ぐにに教育支援の手を差し伸べ、また来日するベトナム、ミャンマーの学生たちを陰から支える。「ちっぽけけど民間大使のつもり」といった役割を担う。



横浜市・金沢区出身。厳格な父親の教育方針で、食事の用意に手抜きは許されなかったという。母親の手伝いは日常のことで 10 代の学生時代から料理を作ることは苦でなく、オーナーシェフとしての基盤はすでにこの時期、出来上がっていたといってもいい。

大学時代はバスケット部の選手。バリバリの体育会系アスリートで、当時の「死ぬ思いの練習が、今の元気さに役立っているのかしら」と、多方面にネットワークを広げ、活動の舞台もまだ広がる。



3年前には、玉縄台に暮らす老若男女がいつまでも玉縄台で暮らし続けられるようにと、同じ志を持つ有志 8 人で「玉縄台で暮らし続けるために」の会を立ち上げた。防災のことや介護のこと、さらにそれぞれ自分自身のエンディングのために。「遠い親戚より近くの他人。最後は向こう三軒両隣、地域のコミュニティが大事ですから」と、地域の絆づくりに力を入れている。

(2014 年 11 月記)

Papateo のホームページ

<http://papateo-tamanawa.jimdo.com/>